

右之通堅相守可申他村エ分水中自村之井樋ニ通水不相成候条心得
違無之様可致事

十年六月一日

廿二小区 用務所

養水時刻割

一、午後一時ヨリ五時迄 田代村

一、〃 五時ヨリ九時迄 詰村

一、〃 九時ヨリ拾時迄 上下小平村

井路水取締役

前掲明治十年(一八七七)六月一日文書〃他村エ分水中自村ノ井樋

ニ通水不相成候心得違無之様可致事」とあるは、暗に不心得者の存した事を意味するか、之等を取締つたり、井路そのものの管理を行うために、今年六月廿三日に用務所は、佐藤平太、首藤哲喜、平野繁蔵の三名を井水取締役とし来鉢村、田代村内成村、別府村字上小平村々の伍長、惣代にその旨を通知した。

註 ① 別府市枝郷安部辰雄氏蔵

② 同前

③ 同前

④ 同前

白杵の切支丹遺跡

増村隆也
森脇隆徳

(一)、白杵城の城壁、城塁に残る切支丹遺跡

一、序

二、白杵城の城壁城塁に残る符牒

三、城壁城塁の符牒に対する考案

四、白杵城(丹生島城)に関する文献

五、遺宮の時期とその場所

八、むすび

一、序

白杵城（丹生島城）に今残っている石壁や空堀の石垣にローマ字の T とか L とか H とかに似通つたものや、或は○△などの形を彫り込まれてあるのも一寸珍しい。これ等の石にきざまれた数多の字を、或は宗麟が切支丹信者であつた所から何かキリシタンと関係あるかのように見える向きもあるが、然しこれは石垣を築く時単に符牒に入れたものであろうと説いている人もあるが、果してこれが単に符牒として彫り込んだものであるうか、この点に就いて今一步を進めて考察して見たいと思う。

二、白杵城の城壁城壘に残る符牒

1. 大手門右側の石燈籠の下に石垣

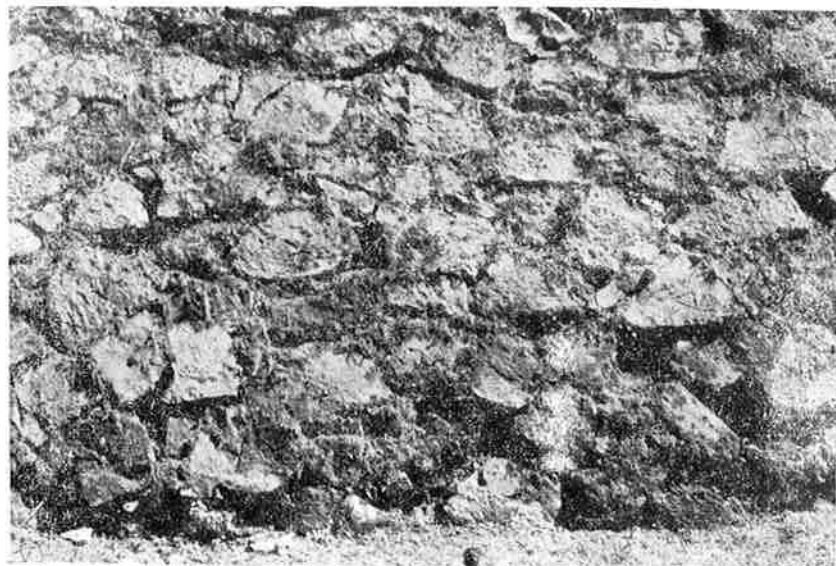
堀を渡つて右側の石燈籠の下に石垣に大の字があり、その下にLの字が二字ありその右に三角があり、更にその右に大きな大の字がある。

2. 畳櫓（鐘楼）の前の石垣

鎧坂を登つて畳櫓に達する左側の石垣の左端に大きなHの字がある。

3. 二の丸の御門を入つて左側の石垣

二の丸の御門を入つて左側の石垣の中央より稍々右に丸の印が一つ更にその石垣の隅に△が一つある。



白杵城空濠（東側）に彫刻された記号群

4. 自動車参道が二の丸に入る前の右側の石垣

自動車参道が二の丸に入る前の石垣に△の印が四つ、十字が一つあり、二の丸に入る右側の石垣に△が三つする。

5. 二の丸より本札に渡る空壕の石垣

空壕の石垣には数多の記号あり、東側の石垣には十字架を掘れるもの七、Hと掘れるもの八、Lと掘れる二、大と掘れるもの八、○と掘れるもの五、△を掘れるもの六、△○を一つの石に掘れるもの五、Mと掘れるもの一、Tと掘れるもの一あり(七三頁写真)。

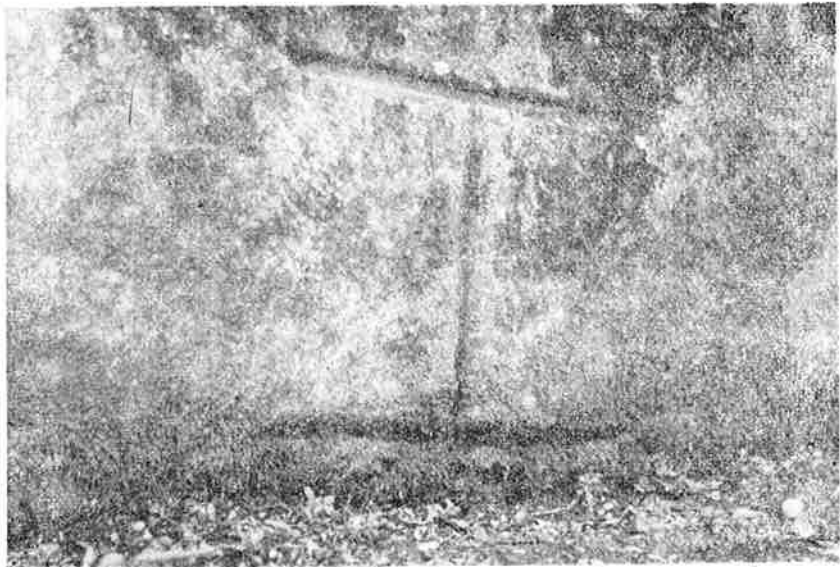
西側の石垣には十字架を掘れるもの四、Hと掘れるもの一、大と掘れるもの三、Lと掘れるもの一あり。

南側の石垣には十字架を掘れるもの一、○を掘れるもの二あり、北側の石垣には十字架を掘れるもの一あり。

6. 空堀を渡つて右側の城塁の石垣

猿を飼つている城塁に向つて右の中央の上部にHが一つあり、その下の地面に接する部にL一つあり、その右に十字架が一つ、その右で石垣の間隙に十字架が一つ、その上に△が一つあり。

猿を飼育している場所の左で地に接する右に大きなL一つあり、更に進んで北に面する部の地に接する大きな石にH一つ、左端にL一つ、



H 記号の城塁白杵

十字架一
つ、右端
の上部に
卍一つあ
り、この
卍は十字
架を凝装
せるもの
と思われ、
更に進ん
で通路に
面せる部
の上部に
日一つ、
日一つ、
L一つ、
その中央
より右側
に十字架
が一つ、
更に東側
に面する

場所	符	△	L	大	H	○	十	○ △	M	T	卍	日	計
大手門燈籠の所の石垣		1	2	2									5
畳 檜 前					1								1
二の丸の入口の石垣		1				1							2
二の丸自動車参道横の 石垣城塁		7					1						8
本丸空堀の石垣 東側		6	2	8	8	5	7	5	1	1			43
〃 西側			1	3	1		4						9
〃 南側						2	1						3
〃 北側							1						1
本丸の城塁		1	3	1	3	1	4				1		14
本丸亀の首に面する腰 掛の石				1								1	2
計		16	8	15	13	9	18	5	1	1	1	1	88

石垣の中央に大の字一つあり。

7. 亀の首に面する腰石

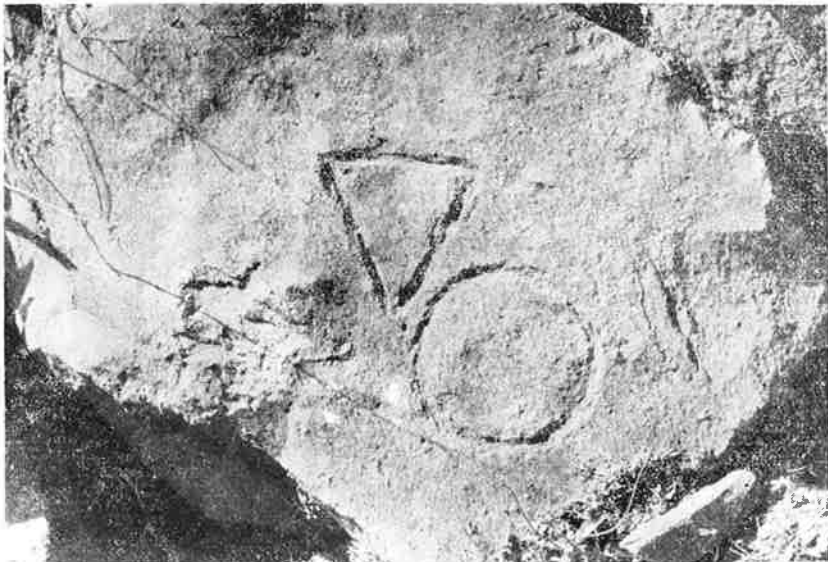
本丸の突端で海に面する部に腰番用に置いてある大きな石の上面に大の字が一つ、日の字が一つあり。

三、城壁、城塁の符牒に対する考察

以上の様に城壁城塁に沢山の符牒があるが、この符牒について考察して見ると、十は十字架の意味と思われ、Mは聖母マリヤを意味し、○は不変、絶対者、最高の善を意味し、HはIHSの略でクリストを表すと云い、△はクリスト教では三角形の愛の平等を表し、頂天の角(カク)は祖父、左の角は御子子、右の角は御精霊を表すと云う。LはLAUSの略字で栄光、名譽を表すと云い、TはT字型アントニオ聖人の名前を表し、卍は十字架を凝装せるものかと思われ、日は日輪の意かと思われる、この意見に就ては津久見カトリック教会牧師フロニー・パウロ氏及び上智大学文学部史学科教授アルカディオ・シュワデ氏の意見に従つた事を附言する。

四、臼杵城(丹生島城)に関する文献

1. 永録元年(1556) 清田鎮忠、田原紹忍(親賢) 兩人を奉行とし



白杵城空濠の記号（丸と三角）

て丹生島に耶蘇宗寺を建立、山森紹庵、吉弘内助、橋本縫殿助（西治記には吉弘内蔵介、橋本正行とあり）三人の神社仏閣を破却する役人に任せられる。（九州軍記、陰徳太平記）

2. 永録五年（1566）五月一日宗麟丹生島に移り剃髪して宗麟と号す。（大友系図）

3. 永録六年（1563）十二月大友義鎮世を義統に譲り白杵の丹生島に移り法名を宗麟と号す。（歴代鎮西要略、豊府紀聞）

4. 永録八年（1568）大友宗麟心驕り政治を怠り、且つ女色に耽る。是に於て老臣等之を諫め新館を海部郡丹生島に造る。義鎮新館に入り剃髪して宗麟と称し法名を瑞峰と号す。一族家老三十余人同時に剃髪す。（軍記略）

5. 元龜三年（1572）ポルトガル船来り、キリスト教を伝う。宗麟一寺を丹生島に建て之を奉ず。（外交志稿）

6. 天正六年（1578）洗礼してフランシスコ宗麟となる。七月十四日丹生島に天主堂を建てられ、市内にはすでにノートルダム寺院が建てられ信者三千五百と云う。（白杵史、年表稿）

7. 天正の比宗麟が清田石見守鎮忠と田原近江守親賢を奉行とし丹生島に切支丹寺を建立す。（古本九州軍記第三卷、九州治乱記）

8. 宮中に会堂を設け毎日弥撒を聞き日曜日及び聖徒の祭日に際し城外の会堂に行かざる時は説教を聴けりと述べたれば世子大いに喜び

明日直に大工を招き御城内に小堂を設くべし。城は大ならず予が望む如き建築の余地なきが少くとも当分は予並に妃が毎日曜日弥撒及び説教を聞き得べし。(臼杵城内に礼拝堂を作る―耶蘇会士日本通信豊後篇下)

9. バードレ、ルイス、フロイスの意見に従ひ洗礼を中止し、代りに城内に設けし礼拝に於て、長老及び副長老列席の上、オルガン伴奏にて弥撒を歌い若王と夫人並に列席者皆非常に満足せり。(臼杵城の礼拝堂に弥撒を行う―耶蘇会士日本通信豊後篇下)

10 天正六年(1578)大友宗麟切支丹の教を聞き廿七年目にカプラーの教に従ひ洗礼を受け早速臼杵城内に天主堂を造る。(臼杵史談)

11 慶長七年(1602)臼杵藩祖稲葉貞通、臼杵城の大手門を東向とし櫓形を築き石垣を作り、城を改築す。(臼杵史談)

12 慶長十三年(1608)二代稲葉典通、城の石壁を修築す。(臼杵史談)

13 寛永四年(1627)三代稲葉一通城の外郭を整備す。(臼杵史談)

14 正保三年(1646)四代稲葉信通、臼杵城の本丸御内所を普請し承応三年(1654)臼杵城の外郭の石垣と二の丸櫓を普請す。(温故年表録)

15、元禄十年(1697)六代稲葉知通城の外郭と北裏門の石垣の修理をし、元禄十三年西丸御書院の修理す、元禄十五年八月大風雨により

本丸走櫓の石垣崩れ所々破損す。(温故年表録)

五、造営の時期とその場所

これ等文献より考察するに永録元年又は元亀元年又は天正六年大友宗麟が臼杵城内に天主堂(礼拝所)を築いた時及び慶長年間再度の工事を行った時彫られたものと考えられ、その後は切支丹の禁教令によつて厳禁されたものと考ええる事が出来る。

空堀に数多の符牒の刻まれた石の用いられている事は天主堂(礼拝所)がそこに造営されていたのではなからうか。

六、むすび

一、臼杵城の城壁城塁の石垣に数多の符牒の刻まれているのを見る
二、通算すると十が十八、大が十五、三角が十六、Hが十三、丸が九、Lが八、丸と三角が同じ石に彫られたもの五、M、T、卍、日が各々一あり、計八十八あり。

三、十は十字架、大は大友、三角は御父、御子、精霊を意味し、HはIHSの略でクリスト、丸は不変、絶対者、最高の善、LはLAUSで栄光、名譽を、Tはアントエオ、日は日輪、卍は十字架をこわしたのと思われる。

四、これ等の符牒は切支丹信者が自分の信仰を表現し、それを末代

まで伝えるべく彫りこんだものと思われる。

五、文献より見ると永録元年又は元龜元年又は天正六年天主堂を臼杵城内に建てた時と慶長中二度の工事に彫られたものと思われる。

(三六、三、九)

(二)、臼杵地方に於ける切支丹遺跡

一、序

津久見で沢山の切支丹遺跡を発見した事は、既に本誌二十五号で報告した所であるが、更に足を臼杵地方に伸ばして見ると、ここにも沢山の遺跡のある事を発見した。その第一は臼杵城の城壁、城壘に於ける符号であり、第二は臼杵地方に於ける切支丹遺跡であつた。

文献を見ると弘治二年ポルトガルの商人ルイス、アルメイダが府内に病院を建て更に臼杵にも病院を建て、永録元年丹生島に耶穌宗寺が建立され、元龜二年豊後の切支丹信者五千人に達し、元龜三年宗麟一寺を丹生島に建立している。又天正四年臼杵に教会堂建立、天正四年七月丹生島に天主堂が建てられ、市内には既にノートルダム寺院が建てられた。天正六年宗麟受洗、天正八年宗麟が受洗するに及び一族家臣の者で洗礼を受ける者が続出し、同府内にコレジョ、臼杵にノビシヤドと言う布教の實際に当る者の訓練所が設立され、臼杵にカサ、プ

ロフエツサーと言う学院が建てられ領内が全く切支丹化したものであつた。斯く見て来ると臼杵に切支丹遺跡が今日迄発見されなかつたのが寧ろ不思議な位である。

未だこの研究は緒についたばかりで、まとめて書くと言う所まで達していないのは確かで、臼杵地方の人が調べてまとめる捨石となれば幸と思つて敢て発表する次第である。

二、臼杵平清水 龍原寺の境内

龍原寺境内に無銘で表面に丸のみある墓が八個あり、明暦三年(1657)、万治二年(1659)、万治三年(1660)、寛文七年(1667)、延宝六年(1698)、天和三年(1683)二個、元禄六年(1693)、宝暦二年(1726)の建立のものがあるが、他に一個火輪に小の字様の切支丹記号のあるものあり。

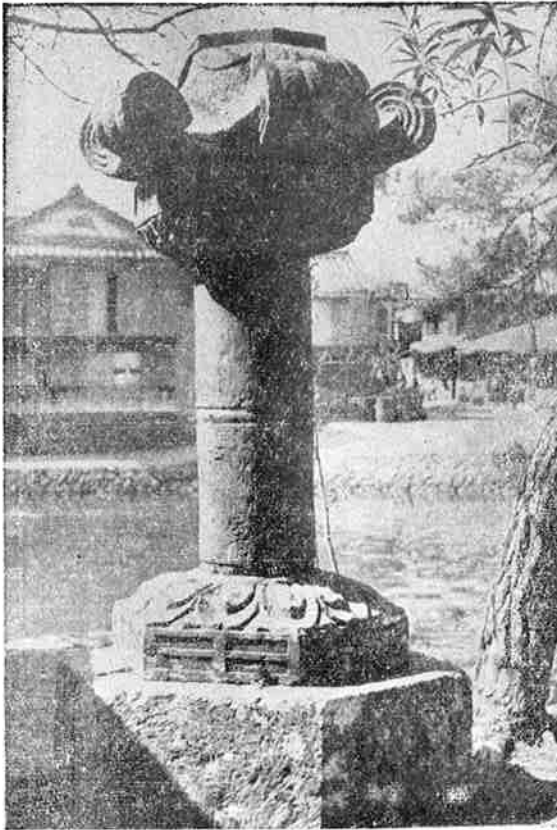
山門の鬼瓦の被風に丸に十字のあるもの六十八個あり、是は薩摩の人が臼杵に移住してこの山門を建立した時、島津の紋を用いたのであると言ふ。島津の紋は勿論切支丹に起因すると言ふ。詳しくは寺の記録が火災で焼けているので知る事は出来ない。

山門を入つて右側に地藏堂あり、中に祀る地藏が抱いている小児の像が、日本人の肢装と違い、マリヤ観音ではあるまいかとの説もあるが、寺の記録ではマリヤ観音らしい記録は見当らない。

三、白杵平清水天満宮の燈籠の台石

平清水（ひらしょうず）天満宮の石段のかかりにある一番下にある燈籠の六角形の石に、四角が左右上下に四つが直接する部に十字架が出来る、この十字架が六個ある。

四、八坂神社の燈籠の台石



八坂神社の登籠

平清水天満宮の台石の十字架と同じ形態の十字架が八坂神社の石燈籠の台石にも見られる。都合十字架が六個ある。（写真）

五、白杵月桂寺墓地の切支丹墓

月桂寺（げつけいじ）の墓地の上の方に平庵型（寄棟型）の切支丹墓が三基あり、左の方の切支丹墓には中に五輪墓が一基入つていて寛永十一年（1634）の建立であり、その横に宝暦九年（1754）建立の仏体を浮彫にした墓が一基ある。年号の他に何も刻んでいないが、他の二基に入っている五輪墓は風輪のそりが甚だしくそつているが目立つ。寺では無縁墓と言つている。その昔然るべき切支丹信者を祀つたものであらう。

六、白杵神社の下にある五輪墓

白杵神社の下で道路は面した右側の山の麓に沢山の五輪墓の部分が積み重ねられている。見ると磨滅がひどく二つに割れているものが多いが、空輪に十字架のあるもの一つ、縦の一線のあるもの四つあり。更に火輪に十字架

のあるもの三つ、縦に一線のあるもの三つあり。

七、深田の木木の石仏前の五輪塔

深田の木木の石仏の過去七仏の前に四基の五輪墓がある、かかりの一基には空輪に3の様の彫刻があり、第二基と第三基には空輪と火輪に縦の一線あり。

この四基の前に自動豆の駐車場として、道の左側に大きく作られた場所に、半円形に最近並べられた五輪塔の中に、かかりの第四基の空輪に十字架をこわした小の字様の彫刻あり、第七基目には風輪に縦の一線あり。

八、臼杵市南津留搔懐（かきだき）国矢矢氏の墓

墓地

この墓地には蒲鋒型で表面に大きな十字架のある墓二基のある事は既に報告され周知の事実であるが、今迄顧みられず、或は踏石としておかれたと称していた斗枿石等々を注意して見ると記号のある事が知られて来る。

この斗枿石にHと刻まれたもの十三個、火輪にHと彫られたもの四個、宝曆四年（1753）の銘あるマリヤ観音一個、墓に丸だけ彫られたもの二個で、貞享五年（1688）のものがある。（写真）



八〇

九、大野郡

野津原町

王子木本

文友氏の

庭

号記の墓斗枿の搔懐

庭に沢山五輪塔が積み重ねられて
いるが、中に空輪
を上から見ると十
字架の彫られたも
の二つ、風輪と十
字架のあるもの一
つ、火輪に縦の一
線あるもの一つあ
り。他に仏体の浮
ぼりしてある仏体

の胸部に十字架一つあり。
裏庭に廻ると空輪にトとあるもの一つ、上から見ると十字架のある
もの一つ、風輪に縦の一線あるもの一つあり。

一〇、大南町大字志津留字角石村上右一氏宅の裏

沢山の五輪墓の積み重ねてある中に塔様に空風火風火風の順に積んであるものあり、その上から三番目につんである火輪に縦の一線あり更に近くの寺屋敷と呼ばれる附近一帯に五輪墓が散乱している。

(三六、一一、九)

(三)、津久見市の切支丹資料

一、目次

- 一、目次
- 二、下青江井無田のクルスバ
- 三、下青江解脱寺横の山
- 四、中ノ内大友宗麟の墓附近
- 五、天徳寺跡
- 六、宗麟の居館跡
- 七、中ノ内鍛冶屋の共同墓地附近
- 八、中ノ内隼鷹天神境内
- 九、八戸の新納武蔵守の墓
- 一〇、八戸の次郎坊、太郎坊の墓
- 一一、四浦摺木の塔
- 一二、堅浦海岸寺の裏山

- 一三、彦ノ内谷川、青坂豊氏宅横の墓地
- 一四、むすび

二、下青江井無田のクルスバ

津久見市下青江井無田(いむた)の世尊寺の下の一郎坂の坂道を登ること約一町、左側に別れる小さな道に沿って古い大きな桐の古株が五、六個ある。この小さい左側の小道に沿ってみかん畑の中を行くと十五、六間で谷川に出る。この谷川の向い側の広いみかん畑の岡が字クルスバと呼ぶ土地である。

全体にみかんの木が植つていて、みかん畑も他のものより奥行が広く、畑は二段となり約一段歩の広さで、畑の裏側は山となり、前面は開け展望もよく青江の市街を一望のもとに収め津久見港を望み、山に向つて左側は音羽山(おとばやま)である。

古老の話ではこのクルスバの横を流れる谷川の水は夏の干魃の時でも決して絶える事なく、清い音をたてて流れていると云う。クルスバも水に便利な所を選んで作られたものと考えられる。

クルスバのクルスは十字架の事で、クルスバは十字架のある場所の意味で、昔切支丹信者がキリストを、礼拝していた所である。

津久見の彦ノ内にクリ芝のある事は周知の事実で、クリ芝はクルスバのなまつたものと言われている。

三、下青江解脱寺横の山

下青江井無田の解脱寺（げだつじ）の石段の登り口の左手の塔の蓋の部（風の部）に縦の一線あり、胴の部（火の部）に十字架が一個きざまれている。山門を入つて左側六地藏の横に三重の塔あり、三重の塔の下から一重と二重の蓋の部に縦の一本の線のきざまれたもの二個、胴の部の四方に×らしき浮彫あり、その横の五輪の塔には頭部に一本蓋の部に二本の縦の線あり、その横に頭部に十字架の刻んだもの一個が転がつている。

左手の岡に登つて左側に折れ稜線近くの松の木の下に、頭部に縦の一線あるもの十五個、四角の胴に八と十字架まがいのもの三個あり更に稜線を登つて墓地の区劃をコンクリートで作つた部に、頭部に縦の一線を刻んだもの七個、八角の蓋に彫刻したもの無数にあり、更に登つて松の根本に、墓を横に倒して地藏の台石としたもの三基あり、台石としたものを見ると、横の三線が刻まれ何も他に刻んでない。それより更に山を登ると、頭の部に縦の一線あるもの三個あり。それより山を下つて四番の霊場の横（四国八十八カ所）に胴の部に十の記号のあるも



解脱寺四番の霊場の横 空輪

の三個、大きな五輪塔の頭部に十字架のあるもの一個あり。山を下つて観音堂の前にある塔を見ると頭部と蓋の部に縦の一線あり、蓋部、胴部、礎部共に八角形をなし、火袋の部に二体つつ仏体が刻まれ、道尾の塔と同型である。堂の前の左横に沢山の五輪塔の部分が積み重ねてある中に蓋に縦の一線あるもの三つあり。

更に庫裡の横の客殿の玄関の左横にある一つの五輪塔には、蓋の部

と礎部に縦の一線あり、胴の部の記号あり。大師堂の横に十字形と見なされる大きな石あり、何か建築に使つたものと思われ中央に穴あり。

観音堂の付近竊符の中には五輪塔が幾らあるかは不明で、笹を切る時があつたらはつきりする事であろう。

四、中ノ内、大友宗麟の墓附近

大友宗麟の墓の左手の山側に転がつている五輪塔の頭部（空の部）に縦の一線のあるもの二つ、頭部に彫刻があつての記しのあるもの一つ、頭部に念入りの彫刻のあるもの二つ、胴の部（火の部）に十字架のあるもの一つあり。

五、天徳寺跡

大友宗麟が津久見に建てた寺を天徳寺と云つた、勿論切支丹寺である。その寺跡を探して古老の話を聞いて見ると、天徳寺のあつた所は津久見市彦ノ内ミウチにある宗麟の墓と小川一つ距てた平坦な一段余りの土地でみかん畑と成つてゐる所であるという。

明治のころこの天徳寺跡、今みかん畑にある扁平な大きな石を、何かと大事な物がかくされているとの云い伝えを真に受けて掘つた者があつた。石は大きく重く夜ではあるして、石を起す事が出来ず、結局

失敗に終つた田である。この宗麟の建てた寺、天徳寺に就いて考察して見ると天徳寺と云うのは天の徳の寺である。天に在します吾等の神よの天である、仏教式に云うならば仏徳寺である。

この天徳寺と云うのは薩摩の大軍が豊後国に侵入して来る直前、島津に連敗した宗麟は天正十四年（1587）三月豊臣秀吉に直接会つて秀吉の援兵を受けて島津を滅さねばならないと考え、臼杵の城から船に乗り大阪に行く時、宗麟は姓を天徳寺と改め、その従士柴田久三統勝（むねかつ）に天徳寺の姓をゆるし、為に大友宗麟は天徳寺宗麟と成り、従士柴田久三統勝は天徳寺久三統勝と改名した訳である。

その事に関し大友文書録には「天正十四年三月宗滴（宗麟）は秀吉の援兵を受け島津を滅ぼさんと欲し臼杵より船を海に浮べ東す。この時、号を天徳寺と改め、従士柴田久三をして天徳寺を号せしむ」と書いてあり、天正十四年十二月宗麟に与えた秀吉の書状には天徳寺左衛門入道（宗麟）と記している事は見逃す訳に行かない。これは秀吉によつて大友宗麟ではなく天徳寺宗麟と云う名前が公認された訳である。又大友文書録には天徳寺統勝と記し、又天正十四年三月二日宗麟のお供をして大阪に行く統勝に忠勤を頼んだ嗣子大友義統（よしむね）の書状にも天徳寺久三と記している。

何故に宗麟が姓を天徳寺と替えたかは大友文書録には「按ずるに宗滴の此の行は頗る義統の使に似たり、故に謙退を恐れて改号に及ぶか

」と記している。

天正十四年三月、柴田久三統勝が天徳寺の姓を許された関係上、同年五月大友義統は統勝の父柴田礼能にも天徳寺を名乗る事を許した。この様な関係で天徳寺は宗麟の姓であり、その姓を許された家来もいた程で、柴田礼能はレイノオと読み、キリスト教の名前である事を知らる。

この大友宗麟の姓である天徳寺が、津久見彦ノ内ミウチに造られた切支丹寺の名前につけられた訳である。

六、宗麟の居館跡

古老の話しては今宗麟の墓のある土地が宗麟の居館のあつた所であると云う。見ると墓のある台地に約六個の礎石が昔のままにおかれている。動かすと何かあたりがあると云つて、昔から誰も他に動かす事なく、昔のままになつていと云う。見ると小さな住宅であつたと想像する事が出来る。この居館から谷川一つ距てた切支丹寺である天徳寺に行つて信仰の生活に入つていた訳である。

慶長十八年(1613)ヨセフが宗麟の墓地に教会を建てている。これが宗麟の墓地に建てたのか、天徳寺跡に建てたのかははつきりしないが、多分天徳寺跡に建てたものと思われる。

七、中ノ内鍛冶屋の共同墓地附近

中ノ内鍛冶屋から田尾(たお)に行く坂の下、枇杷の木の下に頭部に縦の一線あるもの一つ、坂の上にマリヤ観音一つあり。坂の左側の衛門様の墓に登る道の右側に十字架の胴の部分にあるもの一つ、左側に頭の部と蓋の部に縦の一線あるもの各々一つあり。

八、中ノ内隼鷹天神境内

隼鷹(はいたか)天神の後にある大木の根にある五輪塔の胴の部分に縦の一線あるもの一つ、礎石(水の部)に縦の一線あるもの一つあり。

九、八戸の新納武蔵守の墓

八戸にある新納武蔵守の墓には蓋の部に十字架が一個刻まれている。伝うる所では新納武蔵守は平家の落武者と云うが、十字架の墓にある所から見ると時代は大部下り慶長のころの人かと思われ、津久見の伝説も或は訂正せねばならないのではないかと思われる。

一〇、八戸の次郎坊、太郎坊の墓

八戸の次郎坊、太郎坊の墓には蓋の部に縦の一線が各々刻まれている。

一一、摺木の塔

四浦半島の落ノ浦の先、摺木（するぎ）には蓋の部に縦の一線あるもの一基あり。

一二、堅浦海岸寺の裏山

庭の橋を渡つて裏山に登ると、宝篋印塔の台に五輪塔の空輪が十二個ばかりセメントで塗り格構をつけている。その左側に火輪が一つ水輪の上に乘せられている。この火輪に縦の一線あり。更に登ると空輪と地輪のない五輪が、即ち上から風輪、火輪、水輪の順に重ねられ、水輪は他の四角な石と夫婦合せにされた一寸異つた形の五輪の塔がある。この火輪の左側面に縦の一線あり。

更に登ると火輪に縦の一線ある五輪塔あり、これより更に登ると八角の各面に仏体の彫刻された石塔あり。

一三、彦之内谷川、青坂豊氏宅左横の墓地

この墓地は三個所に分れているが直ぐ左横の墓地には、空輪に十字架のあるもの四つ、空輪に小の字らしい十字架をこわしたのものが一つあり。

更にその横の中央の墓地には空輪に縦の一線のあるもの一つ、Tの字のあるもの一つ、空輪に小の字の刻んだもの一つあり、更に珍らし

いのは空輪が細長く風輪に接する部に縦の一線あるもの一つあり。更に右手の奥の墓地に行くとここにも沢山の五輪塔が積み重ねられているが、磨滅が甚だしく記号は明らかに見る訳に行かない、その中に八角の風輪がある。

一四、むすび

一、津久見市内で三十四箇所の切支丹遺跡を発見した。

二、切支丹遺跡は五輪塔の外、切支丹寺跡一、クルスバの塔一、クルスバ一、マリヤ観音三、磨崖の塔群等であつた。

三、五輪塔で十字架のあるもの四五、十字架の一部のあるもの八一で計一二六個であつた。

四、五輪塔でMと書かれているのはマリヤの略字、Cはクリスト、RはREXで王様の略字と思う。

五、最も古いのは、上青江下川内共同墓地の五輪墓の水輪に、書かれてある天正十八年の墨書であつた。

場 所	五輪塔の部分				十字架の一部のあるもの				備 考
	空輪	風輪	火輪	水輪	空輪	風輪	火輪	水輪	
下青江 井無田世尊寺裏山	1		1			1		1	空輪に彫刻
下青江 井無田秋田忠助前		2							
秋田忠助氏宅井戸端	1						1		風輪の底に穴一
下青江井無田 十野文雄氏宅楯	2						2		水輪を開けば十字架 となるもの一
大野敏生氏宅裏山									クルスバの塔
大野権八氏宅裏山					2	3	2	2	
井無田 共同墓地									マリヤ観音一縦一線 一、何もないもの一
下青江 門前の朝山寺跡附近	3	1			5				
上青江 道尾の磨崖塔									単塔四、双塔四横三 線一、何もないもの一 マリヤ観音一、焼け た風輪の立派なもの 縦三線一、横三線一
上青江 鬼丸、石井健氏裏山	1		4				2		
上青江 鬼丸石井恭彦氏宅楯			3						元和元年建立の塔
上青江 鬼丸共同墓地	2		5	2	4	1	2		横の三線一、
下河内釈迦堂楯	1				2		2		
下河内勇士の共同墓地			1						
下河内内丘の塔	1	2	3				3	1	頭部に三線を引く二
下河内平原薬師堂楯					2		3	1	
下川内の薬師堂の塔	1								上から見ると十字架 一
中川内の共同墓地					2		2		胸にMらしき墨書あ るもの二、
奥川内吉良三八宅の裏山	1	1			3		1	3	縦一線一
彦の内ゴシア山頂						2	3		
下青江解脱寺の山	2		1		27	10	7	1	
中ノ内宗麟ノ墓附近	1				3				
中ノ内鍛冶屋の共同墓 地附近			1		2	1			マリヤ観音一
中ノ内集鷹天神境内							1	1	
八戸武蔵守の墓		1							
八戸次郎坊太郎坊の墓						1			

場所	五輪塔の部分				十字架のあるもの				十字架の一部のあるもの				備考	
	空輪	風輪	火輪	水輪	空輪	風輪	火輪	水輪	空輪	風輪	火輪	水輪		
下青江無田 クルスバ跡														
中ノ内 天徳寺跡														
中ノ内 宗麟ノ居館跡														
上青江 葛畑														縦一線あるもの三
四浦摺木ノ墓									1					
堅浦海岸寺											3			
彦の内谷川 青坂豊氏宅裏	3							5						
	17	7	19	2	17	20	34	10						
合 計	34	45				81								
						126								

◎「中津市史」近刊

- 市制三〇週年を迎えた中津市は左の通り市史を限定版で刊行する由
- (一) 目次ノ序文・地質史・古代史・上代史・中世史・近世史・現代史
 - ・美術・民俗史・行事・天然記念物の各項目
 - (二) 執筆者ノ別大貧川光夫・九大松垣元吉・分大半田康夫・芸大中能幡能・別大今永清二・県文化財専委員山本聰治・中津東高校島田義典
 - (三) 体裁ノ別A五約一三〇〇頁、図板廿七頁、総クローズ上製
 - (四) 刊行期日ノ別昭和七年一〇月一日
 - (五) 配布失費ノ別予価二千元(千一五〇円)
 - (六) 申込先ノ別中津市教育委員会内市史刊行会、目下受付中(立川)

◎身辺雑記 土居寛申著並刊

A五・並・孔版 一七四頁 非売 昭和卅四年早春刊

本書は料築中学出身の著者が母校創立六十周年記念に同窓各位の要望により出版したもので、身辺雑記、今昔物語、満鮮行脚、南京のぞ記の四項下に記述された貴重な著述である。(立川)

◎飛松天満宮祭礼の今昔 太田利男編著

A・五・仮・六〇頁・昭和卅七年二月十一日

荏野章氏刊・非売

古式豊かな料築市飛松天満宮関係の古記録を土井寛申氏が発見し、太田利男氏によつて整理編輯されたもので、内容は菅廟碑略解(土居寛申)・第一節祭礼の大観・第二部各町お供廻り沿革誌に分け、更に兩部を細分し各項目古記録により細説した出色の良著である。(立川)